

給水所引き渡しの際の式典の様子



新生スーダン！

変し、デモ騒ぎやクーデターが起る前の平和なスーダンが戻ってきたという印象を受けました。

ローカルスタッフや現地の知人の話を聞くと、政権交代により新しいスーダンができるかと前向き



小川とオムサマー村の子どもたち



〈2019年6月以降の動き〉

- 6月3日** 軍が武力行使による座り込みを強制排除。(死者100名以上)
- 7月3日** 暫定軍事評議会と民主化勢力の交渉が再開。
- 7月5日** 軍人5人、文民6人から成る新たな統治機構の樹立で最終合意。
- 8月17日** 暫定軍事評議会と自由・変革同盟が3年3カ月間の暫定政権で共同統治を行い、2022年に選挙を実施することで最終合意し、暫定憲法に調印。
- 8月21日** 新たな統治機構・最高評議会発足。アブドラ・ハムドク新首相が就任。

スーダン情勢

ハルツームの街中は4月～6月とは一

変し、デモ騒ぎやクーデターが起る前の平和なスーダンが戻ってきたという印象を受けました。

今回は1時間取得完了。また、道中にセキユリティチェックがあるものの、NGOであることを伝えると、許

〈視察の様子〉

4月のクーデターによる政権交代その後6月3日に発生した軍部による虐殺事件を受け、ロシナンテスは急遽日本人スタッフを国外退避させ、スーダン人スタッフのみで継続中の事業に限ってオペレーションを行ってきました。10月に入り、スーダン情勢が安定しつつあるとの情報を得て、事業再開の見極めを行うことを目的に川原と小川がスーダン入りしました。

本出張を経て、日本人の駐在再開が問題ないであろうこと、また政権交代によりNGOの活動が比較的しやすくなり、今後大きな情勢の変化がない限り、2020年から日本人駐在員がスーダンへ戻り、事業を再開することを決定しました。

今回は、入国の翌日から北コルドファン州の訪問を予定していました。従来は、HACからの移動許可を得るのに1週間程度かかっていましたが、今回は1時間で取得完了。また、道中にセキユリティチェックがあるものの、NGOであることを伝えると、許

NGOを取り巻く環境

スーダンでNGOが行うあらゆる業務において、HAC(政府内のNGO管轄組織)が関わっていますが、種々の承認システムが簡略化されており、また、NGOに対する職員への態度がよい方向に変化している印象も受けました。

今回は、入国の翌日から北コルドファン州の訪問を予定していました。従来は、HACからの移動許可を得るのに1週間程度かかっていましたが、今回は1時間で取得完了。また、道中にセキユリティチェックがあるものの、NGOであることを伝えると、許

最後に

今スーダンの人々は、自分達の力でスーダンをより良い国にしていこうという気概を持って生きているように感じられます。ロシナンテスは、少しでもその力になれるように、現地の人々と共に活動を進めていきたいと思います。

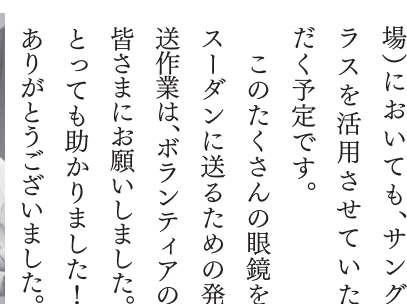
今スーダンの人々は、自分達の力でスーダンをより良い国にしていこうという気概を持って生きているように感じられます。ロシナンテスは、少しでもその力になれるように、現地の人々と共に活動を進めていきたいと思います。



Albasar International Foundation クラークの眼科病院



手術後の患者さんたち



白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

ロシナンテスを応援して下さっているライオンズクラブ国際協会3321C地区眼鏡リサイクル委員会様からサングラス約2100本をご寄贈いただきました。現在、スーダンのAlbasar International Foundationを通じて、現地の人々に配布させていた

ライオンズクラブ様は、日本国内で廃棄された眼鏡及びサングラスを回収し、使用可能なものをクリーニング・滅菌した上で、途上国の奉仕団体を通じて眼科医療を必要とする人々に届けるという活動をされています。その活動の一環で、スーダンにて眼鏡及びサングラスの活用ができないかとお話をいただきました。これを受け、現地のニーズを調べたところ、白内障の患者さんの手術後に、繊細な目をスーダンの強い光や紫外線、砂埃から守る必要があり、サングラスは大いに役立つということがわかりました。

日本からのサングラスを手にした患者さん達が、その場で嬉しそうにサングラスをかけて歩いている様子が大変印象的でした。今後は、スーダンの地方で行われるアイキャンブ(眼科医が地方に出張し、村の患者さんへの眼科治療をまとまって行う場)においても、サングラスを活用させていただく予定です。

このたくさんの眼鏡を送作業は、ボランティアの皆さまにお願いしました。とっても助かりました！ありがとうございました。

サングラスの受け入れ及び配布を担っているAlbasar International Foundationは、途上国において、失明や関連する病気の予防・制御のための活動を行っている国際NGO団体です。

現地での配布第一弾として、10月30日にハルツーム市内の眼科病院「Makhan Eye Complex」にて、白内障の手術後の患者さんへサングラスの配布を行いました。当日行われた35件の手術終了後に、川原と小川、現地スタッフのタグワから患者さん一人一人へ直接サングラスをお渡しすることができました。

白内障の術後の患者さんへサングラス寄贈

事務局だより

こんにちは、杉本です。
数日前に、かつて3年間滞っていたザンビアに舞い戻ってきました。
まず、驚いたのはショッピングモールの多さ、道路の舗装率！7年経ってだいぶさま変わりました。物価も高騰し、日本並みです。
行政(中央・地方)を巻き込みながら、「医」を届ける活動を展開していきます。行政側は何か必要かは分かっているようですが、予算などの制約により現状維持さえ難しい状態です。行政サービスが行き届いていないところをターゲットとして活動しつつ、すべての地域で行政が自分たちの力でサービスを展開していきけるようになることを目指して、働きかけていきます。

私たちNPO法人ロシナンテスの名前は、小説「ドンキホーテ」に出てくるドンキホーテが乗る瘦せ馬のロシナンテに由来しています。「私たち一人一人は瘦せ馬ロシナンテのように無力かもしれないが、ロシナンテが集まり、ロシナンテになれば、きっと何かできるはず！」と考え、「ロシナンテス」と名付けました。
今後もこれを信念として一歩一歩進んでいきたいと考えておりますので、皆さまのご支援をよろしくお願い致します。

ロシナンテス応援企業

内科・外科・消化器内科・緩和ケア内科



医療法人 明気会
岩本クリニック
理事長 岩本拓也
北九州市小倉南区中貫一丁目20-50
TEL 093-472-1281
FAX 093-472-6712

がんばれロシナンテス！

税理士法人
小城会計事務所

北海道旭川市東光8条1丁目1-1
TEL.0166-31-2313

内科／消化器内科／リウマチ科
柏木内科医院
院長 柏木 陽一郎
〒802-0064 福岡県北九州市小倉北区片野2-21-10
tel 093-921-7943 / http://www.kashiwagi-naika.com/

リラクゼーションサロン
Retreat リトリート
高齢者向け訪問型エステサービス始めました。
詳しくはお気軽にお電話ください。
北九州市小倉北区香香口2-2-16
TEL 093-967-1166
OPEN/12:00~22:00 http://retreat-kokura.com/

領収書の年一回発送についてのお知らせ

下記の対象者の方には、一年分のご寄付(1~12月受領分)をまとめて記載した領収書を翌年1月に発送しております。2019年分は、2020年1月末までにお届け予定です。もしも予定日を過ぎてもお手元に届かない場合は、ロシナンテスまでご連絡ください。

〔対象者〕

- ・毎月ご支援いただいている方(クレジットカード・口座振替)
- ・年一回発送をご希望の方

領収書についてよくあるご質問

Q クレジットカードで2019年11月に寄付をしました。2019年分の領収書が届きません。

A. クレジットカードでのご寄付の場合、各カード会社からロシナンテスへ入金されるのはご本人様の申込日の翌月となります。

ご本人様
2019年11月にお申し込み

ロシナンテス
2020年1月に寄付金を受領

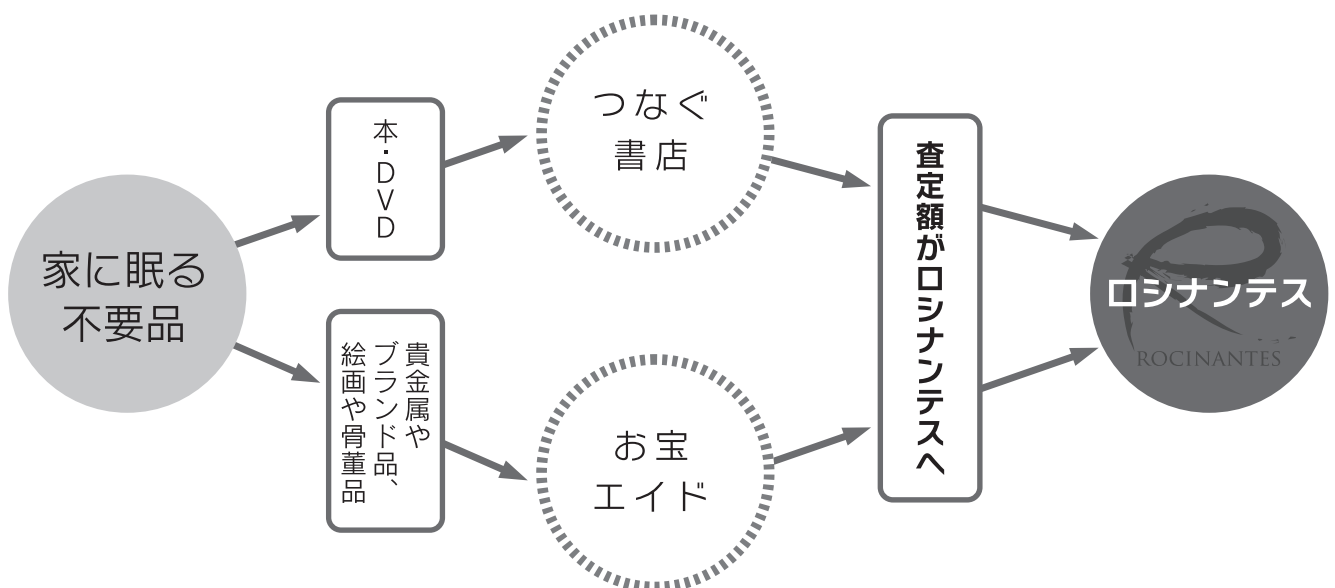
所轄庁の指導により、領収書に記載する受領日はロシナンテスへの入金日となります。そのため今回のご寄付は、2020年受領分となります。何卒ご了承ください。
※郵便局・銀行口座へのお振込は、振込日(金融機関の営業日による)が受領日となります。11月以降に2019年中を受領日とするご寄付をご希望の場合はこちらをご利用ください。

おうちに眠る不用品が寄付になる、物品寄付の受付を始めました！

捨てられないモノを、大切にしてくれる人の手に譲ることができます。

長年眠っているモノが片付くので、大掃除にもびったりです。

金銭以外でロシナンテスの活動を応援できます。



詳しくはそれぞれのチラシをご覧ください。

■本・DVD→つなぐ書店へ送付 ■その他貴金属やブランド品、絵画や骨董品等→お宝エイドへ送付

新しくロシナンテになったスタッフのご紹介



ザンビア事務所 スタッフ

岩吹 綾子

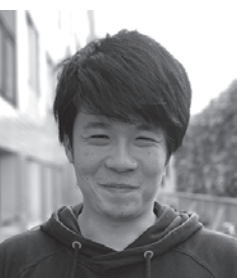
スーダンで青年海外協力隊(作業療法士)の活動後、8月にロシナンテスに入職しました。現地の文化を尊重しながら、精一杯活動していきます。よろしくお願いいたします。



ザンビア事務所 スタッフ

杉本 亜歴

ザンビアでの「医」を届ける活動に参加したく、10月に入職しました。足掛け約30年間、途上国の農業・村落開発に携わってきました。これらの経験を活かしながら、かつて3年間活動していたザンビアの行政・住民を相手に、新しいアプローチに挑戦します。よろしくお願いいたします。



東京事務所 インターン

甲谷 佳之

早稲田大学教育学部6年。ラオスにある小学校で授業をするという大学の学生ボランティア団体で活動した経験があり、国際協力に深い関心があります。よろしくお願いいたします！



東京事務所 インターン

山口 彩恵

ロシナンテスのように海外で医療支援を行う団体に昔から憧れがあり、応募いたしました。大学では紛争や人間の安全保障について学んでいます。毎回沢山の事を学ばせて頂いています。今後も精一杯頑張りたいです。



【基本情報】

首都／ルサカ
面積／752,610km²(日本の約2倍)
人口／1,735万人(2018年:世銀)
人種・民族／73部族(トンガ系、ニャンジャ系、ベンバ系、ルンダ系)
言語／英語(公用語)、ベンバ語、ニャンジャ語、トンガ語
宗教／8割近くはキリスト教
その他、イスラム教、ヒンドゥー教、伝統宗教

ザンビアと聞いて、何を思い浮かべますか？ザンビア共和国はアフリカ大陸の南部に位置する内陸国です。日本からの直行便はなく、ドバイやエチオピア、南アフリカを経由する必要があるため、たどり着くには丸1日ほどかかります。

1964年10月24日にイギリスから独立して以来、内政は安定的で、アフリカの中でも治安の良い国として知られています。1964年10月に開催された東京オリンピックでは開会式(10日)には「北ローデシア」として参加していましたが、24日の開会式当日に独立したため、開会式には「ザンビア」として参加したという逸話があります。

ザンビアってどんな国

【地理】

ザンビアは、コンゴ民主共和国、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ナミビア、アンゴラ、ボツワナの8か国に接しています。ジンバブエとの国境には、世界三大瀑布の1つであり、観光地としても有名なビクトリアの滝があります。



水基金2018 「命を守り、育む『清き水』をスーダンに」給水所完成！

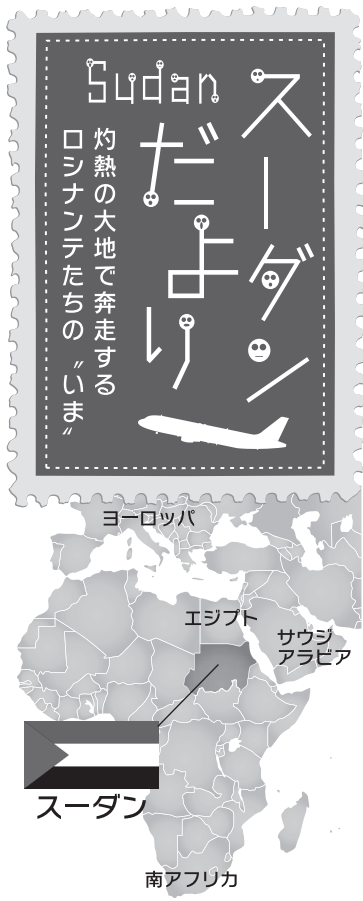
水基金2018「命を守り、育む『清き水』をスーダンに」として、多くの皆さまからご支援をいただいたオナムサマーマ村での給水所建設が完了しました！ご支援いただきました皆さま、ありがとうございました。完成した給水所を利用する住民を対象に、8月21日～27日の7日間、水・衛生、健康に関する啓発活動を実施しました。この内容をお伝えする前に、ロシナンテスが力を入れる給水所建設や、給水所を住民たちが自ら守って行けるようサポートすることの意義を振り返ってみたいと思います。

飲み水、料理、洗濯や洗淨、農業など、私たちの生活の様々な場面で水は欠かせません。水を確保するための様々な努力によって、現在世界人口の半数以上が水道を使えるようになりました。一方、いまだ7億8500万人は清潔な飲み水が手に入らない状況下で暮らしています。

例えば、清潔な水を自宅にいつでも飲める人の割合は、日本は97%ですが、スーダンやザンビアを含むサハラ以南のアフリカでは24%にとどまります。川原もよく、「きれいな水の供給が、百の薬より多くの命を救う」と話しますが、安定して清潔な水を手に入られるかどうかは、1人1人の命と人生を大きく左右します。安心して飲んだり、体を流したりすることのできる水を、必要な時に、安価に、充分な量手に入れない環境は、日々いづもの選択肢を取り上げ、その人やその人を支える人、またその子どもや孫世代の人生も左右します。



命にかかわる水の問題／清潔な水へのアクセスは、免疫力の弱い子どもの生存率に大きく影響します。不衛生な水を飲んで何度もお腹を壊すことは、体力のない幼い子どもにとって致命的です。不衛生な水が原因の下痢で5歳を迎える前に命を落とす子どもたちは、世界で毎日800人以上います。



のぼります。また、十分な水が使えないために衛生状態が悪くなり、他の重い病気になるやすくなり、下痢が続くために栄養を十分に体に蓄えることができず、栄養失調になったりすることも多々あります。

教育への影響／サハラ以南のアフリカ諸国だけでも、330万人を超える子どもたちが、水の重さに耐えながら、毎日遠い道のりを歩き続けています。長い道のりを歩いても、たどり着く先は池や川、野ざらしの井戸など、細菌、動物のふん尿などが混じった危険な水源である事もあります。そうして水くみに時間を費やすために勉強に通えなかったり、遅刻が続いて勉強についていけなくなり辞めてしまったりする子どもが多くなります。また、水が利用できないために学校の環境が不衛生になり、それが原因で生徒や教師が体調を崩し授業に出席できない、授業が行われないといったことも多くあります。教育を十分に受けることができないまま育つということとは、その先よい職業に就いたり、自らの環境を変えるために努力したりということも難しくなります。

水と食料の関係／世界において家庭で使われる水の量は10%とすると、農作物に使われる水の量は70%だそうです。今日、清潔な水を利用できない人の8割以上は、主に農業に従事し、自給自足の生活を営んでいます。必要な量の水を利用できないことで農作物を育てられず、栄養失調や飢餓に陥る家族も多くいます。逆に、きちんとした灌漑設備を整えることで充分な量の農作物を育てられるようになった場合、さらに農地を広げたり余分にできた農作物を市場で売って収入を得たりと、人々の暮らしをより豊かで安心できるものへ変えることができます。

水・衛生・健康に関わる啓発活動

水源を確保した後にも、それを使える状態で維持する取り組みが大切になります。「国際協力」として途上国の村に井戸を作ったものの、すぐに壊れてしまい、現地には直す知識や手段がない資金がないためそのまま使えなくなったという話や、井戸を1か所にのみ設置したため、村人内で争いになり死傷者が出る原因となってしまう、といった話はよくあります。今後長い間、毎日安心して安全な水を使い続けるため、このためには、現地の方々のこれは自分達の所有する、自分たちで守っていく水源だ、という強い意識、その意識を基に地域の住民同士で話し合っ



る不正やめごとの少ない運営方法、ルール、さらによい状態で保つための使い方や修理の方法、清潔な水源を使うことで実際にどのように衛生環境を向上させられるかの知見などが不可欠です。

そのような背景があり、小学校での衛生指導、住民の方との清掃活動、現地住民の方へ水に関する衛生問題の原因と対策の説明の3つのセッションを実施しました。

当初は給水所の完成と同時に実施する予定でしたが、スーダンの情勢悪化のため延期となっており、3ヶ月遅れてようやく実施することができました。

SESSION ① 安全な水と清潔な環境を守っていくためのコミュニティ強化

オナムサマーマ村にあるエルハンサ小学校にて、グループワークやプレゼンテーションを実施。住民45人、講師3人が参加し、「どうして安全な水が大切なのか」「コミュニティとして家庭や地域でどのように守ることができるのか」、さらに「個人としてどう衛生に気を付けることができるか」を主なテーマとして実施しました。具体的には、給水所を清潔に、かつ安全に保つための方法や技術、コミュニティとしてどう衛生活動を主導していくか、各家庭で衛生に気を付ける上で考えるべきトイレの種類、ゴミの処理方法は何か、さらには健康意識をどう向上させるかなど、住民の方々がすぐに暮らしに取り入れられる内容を丁寧に伝えました。

内容については、保健官や水省に相談しながら進め、きちんと地域に根ざした内容で実施することができました。参加した方々からは、知識とスキルが習得できた、と感謝する声があり、講師の方々からは、参加者が積極的に参加してくれて様々なアイデアを出してくれたと喜ぶ声が見受けられました。

SESSION ② 清掃キャンペーン

8月26日には、オナムサマーマ村の市場や家庭、コミュニティ全体でごみ拾いなどの清掃活動を行いました。写真のように、村を綺麗にしてより良い衛生環境の中で暮らすことはもちろんですが、それ以上に住民の方々が村内の環境について関心を持ち、コミュニティの一員としての意識を強めて行動できるようにする事を目的としました。

SESSION ② コミュニティでの啓発活動

8月27日にはオナムサマーマ村にて安全な飲み水、衛生的な環境、水因性の病気に関しての説明をし、そのための行動改善を促しました。大人から子どもまで約800人もの方々が集まり、熱心に話を聞いてくださいました。

今回の活動を通じ、住民の方々の意識や行動には早速前向きな変化が現れています。積極的に衛生環境を改善しようという行動も見られ、それぞれの方が意識し始めた様子が見受けられました。また、さらに多くの人々に衛生教育を実施するため、健康を促進する委員会のためのオフィスも設立されました。

【文化】

日本には馴染みのない文化として、チーフ(首長)の存在があります。全土に渡りチーフが管轄している土地があり、国民のIDカードにはそれぞれ地域のチーフ名が記載されています。ザンビアの省庁にはチーフと伝統を担当する省も組織されています。

ザンビアの土地保有の仕組みは、多くのアフリカ諸国と同様に、各民族の慣習にもとづく共同保有と、法令による土地保有証明書にもとづく土地保有という2種類の仕組みがあります。ザンビアの国土のうち90%以上が慣習法にもとづく慣習地と呼ばれる土地です。慣習地は、チーフや村長が使用権や土地の割り当ての権限を持っています。都市部は例外ですが、村落部では新しく引越しをしようとする

とチーフに相談することになります。



雨乞いのレモムでチーフの顔がプリントされた衣装を着る人々たち



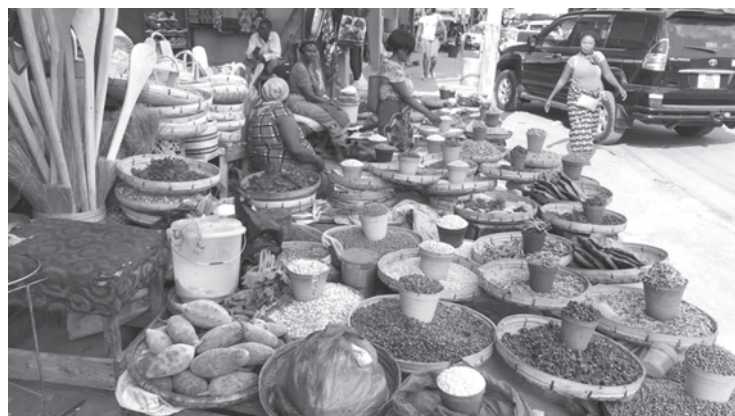
【食事】

ザンビアの主食は、シマ(shima)です。シマは白トウモロコシの粉をお湯で練り固めて作ったものを、蕎麦がきのような形で、一口分のシマを手で握り、おかずと一緒に食べます。(これが時にものすごい熱いんです！手の皮が厚くなりそう！)

手で食べるため、シマを出すレストランや食堂には必ず手洗い場があります。庶民的なお店では、日本人が想像するような水道ではなく、バケツに蛇口を取り付けたものが利用されています。



シマ以外にも、キャッサバ、雑穀、米、ジャガイモ、バスタなども食べられています。主菜は牛、豚、ヤギ、チキン、魚、虫(イモムシや羽アリなど)などがありますが、特に魚やチキン



ザンビアだより

「活動開始！」

今年、ロシナンテスはザンビア共和国中央州チサンバ郡で活動を開始することを決定しました。ザンビアでの展開を決めた理由は多々ありますが、大きくまとめると以下のようになります。

- ・医療保健のニーズがあること
- ・英語圏であること
- ・治安が良いこと
- ・他団体が活動しており、連携がとれそうであったこと

各地を視察

ザンビアにおいて医療施設は、提供する医療が高度な順に、ホスピタル、ヘルスセンター、ヘルスポストに大きく分類されます。日本において初めから大学病院ではなく、まずはクリニックで受診するよう、ザンビアでも、基本的にまずはヘルスポストで受診し、必要に応じてより高次の医療施設に紹介される仕組みになっています。私たちは、チサンバ郡の中でも、ムワブラ・ヘルスポストの管轄地域で活動を行います。



ムワブラ・ヘルスポスト

な場所を訪問しました。ルサカ州および中央州では、他団体によるヘルスボランティアの育成のの様子や完成後のマザー・シェルター、巡回診療を視察。



アウトリーチ用の荷物を積んだ車



気をつけるべき健康計画

コッパーベルト州では、保健分野など様々な知識の普及に努める若者グループの育成を視察。そして南部州では、地元のホテルにおいてアウトリーチを視察しました。

「マザー・シェルターとは」

妊娠8ヶ月以降の妊産婦が出産まで宿泊する建物です。ザンビア政府は近年、出産に伴う危険から母子を守るため、自宅ではなく医療施設の出産を義務付けました。しかし、最寄りの医療施設が自宅から何十キロも離れている地域において医療施設で出産するためには、陣痛が来たら自宅を出発するのは間に合いません。そこで、予め医療施設の近くに宿泊し、出産を待たせる施設として、政府はマザー・シェルターの設置を推奨しています。

「アウトリーチとは」

医療施設に勤務する医療従事者による、医療施設から離れた地域での診療のことです。医療従事者たちは、必要な道具や医薬品を車に積み、アウトリーチサイト（アウトリーチが行われる場所）を訪問します。通常の診療のほか、乳幼児の身体測定や予防接種、マラリアやHIVの検査などが行われます。

危険にさらされる妊産婦と子ども

各地を視察した結果、母子保健の支援が必要とされていると実感しました。各団体が素晴らしい活動を行っている一方、外部からの介入がない地域とのギャップはとて大きいものでした。例えば、海外の団体が建設したマザー・シェルターには、妊産婦本人や付き添い者のベッドや清潔なトイレ、調理場が整備されていた。しかし、外部による支援を受けていない別の医療施設では、マザー・シェルター内にベッドも何もなく、専用のトイレもありませんでした。さらにほかの医療施設では、マザー・シェルター自体がないといった状況でした。

WHOによると、ザンビアにおける2015年の妊産婦死亡率は出生赤ちゃんで生きて生まれるケース10万件あたり224件（2017年の新生児死亡率は出生1000件あたり22件）。国別で比較すると、全世界で悪い方から3分の1に入る水準です。これらの数値は、ザンビアで妊産婦や子どもがいかに危険にさらされているかを示しているように思います。

活動予定地が抱える課題

チサンバ郡は、面積5,526平方キロメートル、人口13万3千人程度の地域です。郡内に18の医療施設がありますが、住民

の医療施設へのアクセスは大きな課題です。また、何となく医療施設に行っても、医療従事者や医薬品、設備などが不足していることもあります。このような状況下、妊産婦は多くの困難に直面します。まず、妊娠中の産前健診。繊細な身体で医療施設またはアウトリーチサイトまで、何時間も歩かなければなりません。そのうえ、家族の中で決定権を持つ夫や父親などの理解がないために、産前健診を受けることさえ許されない場合もあるのです。

安全なお産のために

こうした状況から、私たちは、ムワブラ・ヘルスポストの管轄地域において妊産婦が適切な周産期ケアを受けられることを目指し、活動を行いたいと考えています。検討中の活動の1つは、マザー・シェルターの整備。現在、ムワブラ・ヘルスポストにはマザー・シェルターがないため、ヘルスポストの近くに新設することを検討しています。また、S・MAGによる啓発活動を通じて、妊娠の出産で必要になる費用を前もって説明し、時間をかけて工面するよう促すことで、お金が足りないためにマザー・シェルターを利用できない事態を防ぐこともできるかもしれません。

と考えています。その理由はヘルスボランティアのモチベーションの1つには、新しいことを学べるという要素があるためです。トレーニングを通じて新たな知識を手に入れることが、更なるやる気を引き出し、メンバーの定着に繋がることを期待しています。この活動に続き、新たなS・MAGメンバーの育成も行いたいと考えています。人数が足りないという地域住民に役立つ活動をつくっていくたいと思います。



視察先での挨拶と簡易ヒアリングの様子

「ザンビア事務所開設」

オフィス

7月中旬から、日本人スタッフが事務所開設と事業開始の準備のためにザンビア入りました。それから数か月間、事業関係者との協議や候補地の視察などをしながら、並行してオフィスの物件探し、車両選定、ザンビア人スタッフの採用などを着々と進めてきました。

「旧オフィス」

首都ルサカ市内から車で50分程北上したところに位置する、中央州チンボ郡の10マイルズという地域にあり、最寄りのバス停と市場までは徒歩40分程と、少々アクセスの悪いところでした。ルサカ中心部で仕事の打合せが入っている日には、車で往復2時間程度の移動時間を要します。また、休日にプライベートルトで市内に出かける際には、徒歩と2つのバスを乗り継いで1時間半程かかっていました。

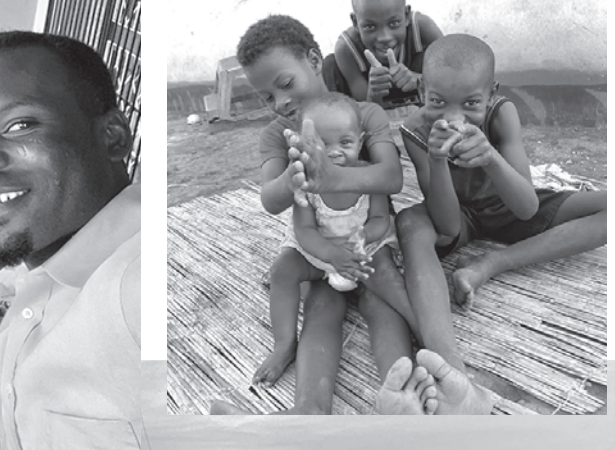
●環境としては、都市部と異なり、自然が多く、とてもどかで治安の良い

ところでした。ただし着くには木々の生い茂った道を通過する必要があります。ザンビア人、日本人スタッフともにオフィスのことを「Ezi（茂み）」と呼んでいました。

「新オフィス」

●新オフィスは、ルサカ中心部のショッピングモールから徒歩5分程の場所にあり、最も注意した点はセキュリティでした。アフリカの国々の首都の中では比較的安全な良いルサカですが、近年では強盗やひったくりなどの軽犯罪の発生が増えています。スタッフおよびオフィス物品の安全を確保するため、敷地入口の門に警備員が昼夜ともに常駐しているところを選びました。また、玄関はもちろん裏の勝手口や全ての窓に備え付けの鍵に加えて南京錠をかけ、安全対策を万全にするよう努めています。

●玄関から入り、手前のダイニングリビングルームをオフィスとして、奥のベッドルーム3部屋を住居スペースとして利用しています。オフィススペースには、先日デスクとイスを設置し、いよいよ事務所らしくなってきました。住居スペースには駐在員が3名住めるようになっています。



視察先での挨拶と簡易ヒアリングの様子

ザンビア人スタッフのご紹介

10月1日より、ザンビア人2名がロシナンテスに加入しました！2名とも、ザンビア事務所の立ち上げ当初から業務に携わってくれています。



グリフィン

フィールドコーディネーター

3人の男の子を持つお父さん。幼いころ、お母さんが地域のヘルスボランティアで働いていたことから、地域の保健に関わることを身近に感じていたそうです。ロシナンテス入職前に10年間に上国際NGOであるAARザンビア事務所



エリック

ドライバー

所で仕事していたため、プロジェクトの経験が豊富です。はにかみ笑顔がキュート！

新しく仲間入りした2名にインタビュー！

⑥グリフィン ⑦エリック

ロシナンテスで働くことを決めた理由を教えてください。

⑥自分の目標とロシナンテスの目標が一致していると思ったからです。村落部の医療事情を改善し、子どもや妊産婦の死亡を防ぎたいです。

⑦子供の頃に叔父さんから日本の話を聞き、日本人と一緒に働きたいと思っていました。文化の異なる人々と働き、協力し合うことが自分の目標です。

ザンビアでおすすめの食べ物をお願いします。

⑥シマ。（メイズと呼ばれるトウモロコシの粉をお湯で練ってつくる主食）家でも毎日シマを食べています。おかずは豚肉や魚が好きです。シマの次はゆでたジャガイモとソーセージがおすすめ。

⑦シマ！

宝物は何ですか？

⑥命。命を守るためにはコミュニティにおいて基本的なニーズにアクセスできること、健康の安全、食の安全が常に保たれること、また社会インフラ、経済が整うことが必要です。

⑦信頼です。

今後の抱負をお願いします！

⑥コミュニティのマインドセットを変えたいです。現状、コミュニティ、ヘルスポストやヘルスセンター、政府の三者の間には大きなギャップがあります。ヘルスポストとコミュニティのギャップは比較的埋めやすいと考えています。コミュニティに介入し、地域の伝統的リーダーを動かせば変えられます。リーダーはコミュニティ、ヘルスセンター、郡に対して影響力があるので、医薬品が足りない、ヘルスポストにアクセスできないといった問題を、コミュニティ自身のリソースで解決するよう働きかけることができそうです。また、継続性が大切です。ロシナンテスが去った後も、ヘルスポストへの搬送や、マザー・シェルターの維持管理をコミュニティ自身が行えるようにしたいです。

⑦郷に入れば郷に従えという言葉通り、日本の組織に入ってからには日本のルールでがんばろうと思っています。

最後に一言！

⑥自身の強みを大いに生かし、団体の活動の発展に貢献します！

⑦皆で手を取り合い、どんなことも成し遂げていきます！

E V E N T R E P O R T

REPORT1 2019.07.17

アブティンさんと
スーダン情勢について対談

理事長・川原と、スーダンで生まれ育ち、日本で平和構築学を学んだモハメド・オマル・アブティン氏が、スーダンにおける政権崩壊について対談するイベントを開催しました。



4月のパシール元大統領退陣後、暫定政権を経て民主的な選挙を行う予定であることが発表されていました。しかし軍と民衆側での話し合いが行き詰まり、6月3日、軍がデモ隊を強制排除し死傷者が出る事態に発展してしまいました。

このこと自体はとても痛ましいですが、政権崩壊を成し遂げるまでの間、スーダンの人々は本当に我慢強く、平和的に抗議活動を行ってきていました。日本の報道においては「クーデター」のような強い言葉が使われ、怖い国、危ない国、といったイメージが先行していた現状を受けて、実際のところどういう状況なのかを知ってもらいたいと思い、このイベントを企画しました。



当日は、実際に過去何度も同じような形で政権が倒れていること、今回の強制排除には近隣諸国との関係が大きく影響していることなど、アブティンさんの深い知見を川原が聞き出す形で対談が行われました。難しい内容も多かったのですが、参加者の皆さまからは、それまでのスーダンの歴史や背景も含めて理解できた、新聞で読んだイメージとは全く違った、もっと勉強していきたいと思った、など、スーダンへの関心を高めていただくきっかけになったのではないかと思います。ご参加いただきました皆さま、ありがとうございました。

モハメド・オマル・アブティン氏
NPO法人スーダン障害者教育支援の会(CAPEDS)理事。1978年、スーダンの首都ハルツームに生まれる。母国スーダンの紛争問題と平和について学びたいという思いから、東京外国語大学に入学。同大学の特任助教を経て、現在は大学院法学部政治学科特別客員教授。スーダンの内戦の歴史を検証しつつ、2011年の南部独立後のスーダンを見守り、祖国平和のために発言を続ける。

REPORT2 2019.07.28

京都・貴船神社の境内で講演



7月28日、貴船神社の境内にて、理事長・川原による講演会を開催しました。元々5月5日に予定していた本講演ですが、ロシナンテスが事業を行うアフリカ・スーダンの政情が不安定なことから、延期とさせていただいておりました。貴船神社様の温かいご配慮に



より、再度企画開催できる運びとなりました。

今回は初の野外、かつ初の紙芝居形式での講演と、色々なチャレンジを詰め込んだ講演会でしたが、当日は雨や暑さも問題なく、気持ちの良い気候の中で実施することができました。

紙芝居の表紙は、イラストレーターの黒田征太郎さんにご提供いただきました。お願いしたその場で、水をテーマに描き上げていただきました。



また、カルカデをお配りしたり、紙芝居をめくる役をお願いしたりと、ボランティアの皆さんの大活躍にも助けられました。ご協力いただいた皆さま、お立ち寄りいただいた皆さま、ありがとうございました！



REPORT3 2019.08.28~10.18

全国各地で活動報告会を開催

日ごろなかなかお会いできていない皆さまにスーダンの今をお伝えすべく、神奈川、宮城、愛知、大阪、福岡、北海道、広島と、全国各地で活動報告会を開催しました。なるべく密にお話ししようと、小規模の会場を選んで回った結果、質疑応答や開始前・終了後の時間に1人1人と向き合うことができ、とても新鮮な場となりました。



また宮城県名取市で開催した際には、2016年まで実施していた東北事業でお世話になった方々と再会し、その後の活動についてお話をお伺いすることができました。詳しくはウェブサイトのブログに掲載していますので、ぜひご覧ください。



宮城講演にお集まりいただいた皆さんと！



<https://www.rocinantes.org/blog/kawahara-blog/3584/>

雲 | 外 | 蒼 | 天 |

「ザンビアの停電事情」

ロシナンテスの事務所は首都ルサカにありますが、乾季の終盤である現在は計画停電と計画外の停電が毎日続いています。日中はほぼ停電しており、朝6時前後〜22時前後までは電気のない生活です。電気が使えない環境に身を置くことで、冷蔵庫や洗濯機など電化製品のありがたさを改めて感じる毎日です。

豊かな水源を持つザンビアには数多くのダムがあり、ザンビア国内の発電量の85%は水力発電でまかなわれています。ジンバブエとの国境を流れるザンベジ川の中流に作られたカリバ・ダムが、そのうちのおよそ3割を供給しています。このカリバ・ダムの建設にともない誕生したカリバ湖は、面積が琵琶湖の約8倍もあり、長さ220km、幅40km、面積5580km²と、世界でも有数の規模を誇る人造湖です。カリバ・ダムに加え、同じくザンベジ川中流に位置するビクトリアの滝と、その支流であるカフエ川のダムを合わせた3か所が、ザンビア国内の発電量の多くをカバーしているのです。

水力発電で国の電気をまかなっているため、乾季は電気不足になることもあります。ビクトリアの滝の乾季の水量は雨季の10分の1程度と、増水期と渇水期の差が大きいことで有名です。こうした電力不足は、市民の生活はもちろん、国の経済にも影響します。ザンビア国内の電力のおよそ半分は、ザンビアの主力産業である鉱業で使用されています。そのため、大規模な計画停電

や電力不足による料金の値上げで大きな打撃を受けており、生産量は電力の供給状況に左右されているのが現状です。

また、多くの電力を必要とする鉱物の生産は、主に国の北部で行われていますが、大規模な水力発電所は南部に集中しているため、南部で発電された電力を北部の鉱業施設に送配電する施設の充実に課題となっています。

ザンビア政府は2020年までに水力、太陽光、火力等の発電所を増設することを宣言しているものの、経済成長や人口増加による電力の需要は増え続けており、供給が追いつかない状態はしばらく続きます。



雨季のビクトリアの滝→

←乾季のビクトリアの滝
特に2015年以降、干ばつによりダムの水量が大幅に減少し、1日の停電が8時間を超えることも珍しくなくなっています。

日タツラツラ日記③

「インターン2か月目の気持ち」



山口・インターン業務のある日は「平日はどんなことに会えるだろう」と朝起きてワクワクしながら事務所に向かっています。業務に関してだけでなく、トープの巻き方、各地の主食の分析、テロ対策の心構えや走り方、広報のコツ、コミュニケーションの注意点など、この1か月、参加するたびに様々な事を教わり、また経験させて頂くおかげで、自分の視野がどんどん広がっていく事を、とても嬉しく思っています。また、事務所の方も現場の方も、職員の方全てが真摯に向き合い取り組まれる姿を見て、刺激を受けています。ロシナンテスに関わる事ができ嬉しく思うとともに、今後もしっかり進んでいきたいです。

甲谷・ロシナンテスでインターンをしたと思ったのは、ロシナンテスのような国際協力の組織を感じたいという思いがあったからです。



そして実際にすることができています。そう感じる一番の理由は、完璧な連携です。日本とアフリカで密に連絡を取っており、的確かつ迅速に情報が交換されていました。日々状況が変化する最前線の現場だからこそ、必要な組織力だと感じました。これからも多くのことを学び、ロシナンテスに貢献できるよう頑張ります。

日タツラツラ日記④

「初めマのブース出展」

いつもご支援ありがとうございます！北九州本部の吉川です。10月11〜13日に大分県大分市で開催された「スポーツ・オブ・ハート in 大分 2019」にロシナンテスのブースを出展させてもらいました。障がい者も健常者も一緒に楽しめるスポーツと文化の祭典と題したイベントです。

スタッフは北九州本部から私と切通、ボランティアさん4名。全員がブース出展は初体験。不安でいっぱいながらも、一足先に東京会場で出展した川原やスタッフにアドバイスをもらい、活動紹介パネルなどの装飾やスーダンの民族衣装体験コーナー、カルカデ(スーダンで飲まれているハイビスカスティー)を準備。気合いを入れ当日を迎えました。あぁ、なのに……！台風19号の影響で屋外の会場は10mの強風が吹き荒れました。ブースの側面に張り付けた装飾やパネルは風に煽られて次々と落ち、カルカデも埃まみれになるため中止せざるを得ず……台風のバカ。

そのような天候の中でしたが、他ブースでは「車椅子クラブ」や聴覚障がい者の「デフバレーボール」などの体験コーナーが盛り上がりつつありました。激しいブレイに私は見ているだけでも怖かったのですが、参加している特に子供たちが選手たちに遠慮なくぶつかり、それを楽しんでいる姿を見てみると、余計な意識を取り除くことの大切さを実感しました。

厳しい戦いをなんとか終えた私たち、帰り路は超爆睡でした。だって前夜は緊張ではぼれなかったんです……(笑)。次回はもう少し力を抜いてくださいね。

ボランティアさん、ブースにお立ち寄りいただいた皆さま、ありがとうございましたー！

